

異文化との交流と仏教

——アレキサンダー大王、『那先比丘経』、『維摩経』の梵本など——

舟 橋 尚 哉

はじめに

大谷大学を定年退職してから、もう三年にもなる。寺務に追われて論文を書くこともなく過ごしてきたが、突然、仏教学会評議員会において、貴殿は「仏教学セミナー」の執筆者に決まったから、との依頼状を受け取った。

そこで、今まで大谷大学短期大学の文化学科で、「比較文化」とか「文化を考える」とか、のインドを中心に中国、日本へと伝来した仏教について、授業を行なってきたので、それらの授業で用いた資料を整理して、仏教がどのようにして世界の三大宗教（または四大宗教）となりえたかを、異文化との交流の上に考えてみようと思う。

ただし、最近の学界の進展には、驚くほどの発見などがあり、特に写本においては『維摩経』の梵本が見つかり、それが出版される^①という快挙があり、これらについても言及してみようと思う。

一、アレキサンダーとインド——仏像誕生地との関連性——

今年の二月上旬に「アレキサンダー」という映画が全国の映画館で封切られた。制作費二〇〇億円、壮大なスケール

ルで描くスベクタクル超大作という「ふれこみ」で、スケールの大きい内容のある映画だったと思う。

私も以前、「インド仏教史」や「比較文化」などの授業を担当していたので、大変興味を持って見に行った。

B.C. 三二七年^②、アレキサンダーが西北インドに侵入し、インダス河まで兵を進めたことは歴史上の事実である。ただ何故、インダス河を渡ってインド本土へ深く侵入しなかったか、については、今まで私は授業などで、アレキサンダーは遠征の疲れと、インドは暑い国であるから、これ以上進攻することを部下達に反対され断念したと説明してきたが、映画では、それらの理由以外にバクトリアの地主の娘と恋におちいり、「バクトリアの地主の子孫が将来、われわれの国の王になるのか？」との部下達の反対にあい、インド本土へ深く侵入することをあきらめたと描かれていた。

私が注目したのは、「バクトリアの地主の娘」と恋におちたという点である。勿論、バクトリアの娘との物語は史実かどうかは、よくわからないが、匈奴に追われた月氏はB.C. 一三〇年頃にバクトリアに移り、トクハラ族の国を征服した。このバクトリアは後に休密、貴霜、隻靡、胖頓、高附の五部族に分かれ、中でも貴霜はクシャーナ(クシャン)といわれ、強大な勢力となり、クシャーナ王朝の初代はクジュラ・カドフィセスが統治した。その子、ヴィマ・カドフィセスにつづいてコータン(于闐)からやってきたカニシユカ王がクシャーナ王朝、三代目の王として即位するが、この王が仏教に帰依し、大塔を含むカニシユカ伽藍が造られ、この大塔よりカニシユカ王の舍利容器が発掘されたという^⑤。

勿論、時代的にはその間にマウリヤ王朝の三代目アショーカ王が即位(B.C. 二六八年頃)したり、ギリシャ系のメナンドロス王(B.C. 二世紀)が仏教に帰依し、このことが『那先比丘経』という経典として残されている。

従って、仏教誕生地として有力なガンダーラの地はギリシャ思想の影響が大であり、カニシユカ王の時代(2世紀頃)に仏像があったこと(カニシユカ王のコインにBODDOとあり仏像が描かれている)は明らかであり、それと

関連してこの地が仏像の誕生地として注目されている。

勿論、仏像誕生地としてはマトウラーも有力地ではあるが、最近ではガンダーラ仏の誕生によって、マトウラーでも仏像が造られるようになったという説が有力であり、私もそれを支持したい。

いずれにしても、仏滅後から紀元前までには仏像はなかったと考えられる。干潟竜祥博士も、これについて、

「早い時代のそれらの仏教芸術には全然釈尊の像がない、即ち無仏像の仏伝描写である。これは周囲の情景（例えば菩提樹下に台座、天蓋の下に台座、周囲の人物と台座、又は天蓋等）によって、またはそれに一部分微標（Symbole、例、台座の上に輪宝）を用いることによって、観る人をしてその観念によってそこに釈尊の存在及び動作をよみとらすという表現法である」^⑥

と述べておられるように、仏滅後の早い時代には「釈尊」または「仏像」を直接描かず、「法輪」や「仏足跡」によって仏陀を表現したり、「菩提樹」や「天蓋」または「台座」（金剛座）などによって、仏陀の存在を象徴的に表現したと考えられる。

いずれにしても、アレキサンダー大王の西北インド侵入により、この地にいくつかのアレクサンドリアが残ったように、ギリシャ思想の影響を受けた、いわゆるヘレニズム文化が栄えとなり、仏像誕生もこのような時代背景のもとに、仏像が造られるようになったと考えられる。

なお最近、アフガニスタン北部の遺跡で出土した五世紀ごろの遺品である仏陀図にギリシャ文字を記した珍しい仏教の祈祷文書が見つかったとのことである。

アレクサンドロス大王の東征で伝えられたギリシャ文字で、言語は古代のバクトリア語。縦三三センチのネクタイ状の麻布に書かれ、上部に仏陀図、下部に修行者らしい人物像とブドウ唐草文がある。（朝日新聞平成十五年十二月十九

二、ミリンダ王とアレクサンドリア

アレキサンダー大王は、BC・三二七年インドに侵入し、インダス河まで進攻したが、部下達の反対に会い、翌年西方に帰還し、BC・三三三年七月、バビロニアのバビロンで客死したという。その後、西北インドはしばらくの間、ギリシヤ人の軍事的制圧下にあった。BC・三三二年頃、チャンドラグプタが挙兵してマガダ王となり、マウリヤ王朝を創始したが、彼は西北インドからギリシヤ人の軍事的勢力を一掃し、インド全体を初めて統一したといわれる。たまたま、シリア王セレウコス・ニカトルがアレクサンドロスの故地回復を志してBC・三〇五年にインダス河を越えて侵入してきたが、チャンドラグプタはその軍隊を撃破した。しかし両王の講和が成ってセレウコスの大使としてメガステネスがチャンドラグプタ王の宮廷に派遣されたという。

かれがインドから故国に帰つてのちに、インド滞在中の見聞を記したものが『インド誌』である。この書は現在、断片的な引用文しか残っていないが、実際にインドを旅行し、インドの大王と直接に交渉を行なった人の旅行記として西方の世界ではかなり重視されている^⑪。

さてバクトリアはオクサス川（アム・ダリヤ川）とインダス河との中間の地域にあたり、この地はディオドトスが叛乱を起して独立し、バクトリア（大夏）国を建設した。^⑫（BC・二一五〇年頃）

「ストラボンの地誌によると、ギリシヤ人の支配領域を *Transoxiana* とインドとに向つてひろげてインドにも侵入したバクトリア王が二人ある。それはデーメートリオスとメナンドロスとである」^⑬

といわれているが、デーメートリオスはバクトリア王国第4代目の王で、インドに侵入してパンジャーブ地方と西部インドの諸地方とを支配した。^⑭

またメナンドロス王はインドではミリンダ王といわれ、^⑮ ナーガセーナ（那先比丘）との問答が *Milindapatha*（ミ

リンダ王の問い)として、また漢訳では『那先比丘経』として現存している。

このメナンドロス王はエウティデーモス↓デーメートリオスの王統に属する王で、大体B.C.一六〇―一四〇年頃にカーブル地方を統治していたが、その後、インドに侵入した王で、ギリシャ方面の史書やインドで発見された貨幣や碑文に「メナンドロス王」という名があげられている。¹⁶⁾

かれはアフガニスタンのカーブルの近くのアレクサンドリアで生まれたらしい。『ミリンダ王の問い』の中で、ナーガセーナ長老はミリンダ王に問うて「大王よ、あなたの出生地はどこですか」「尊者よ、アラサンダ(Alasanda)と名づける島(dīpa)がある。そこでわたしは生まれました」と答えている。¹⁷⁾

アラサンダとはAlexandriaのことに他ならず、dīpa(島)というのは、二つの川が合流してできた中州のようなところであろう。この辺りにはアレクサンドリアは数多くある。

- 1、カブルの近くの白人治下アレクサンドリア(ベグラム)
 - 2、その五〇〇―六〇〇km南のアラコシアのアレクサンドリア(カンダハル)
 - 3、カブルから一〇〇〇km位山奥へ入った所の最果てのアレクサンドリア
 - 4、カブルの二〇〇km西のバクトリアから西へ五〇〇kmのアレクサンドリア・マルギアナ(メルブ)
 - 5、ヒンズークシユ山脈の西側のアレイアのアレクサンドリア(ヘラート)
 - 6、インダス河に合流する一番東側の川を遡ると、ラホルの東、二〇〇kmにあるアレクサンドロスの祭壇の地
 - 7、ジェラム川、チェナブ川、ラビ川、ピラス川とインダス河の合流地点のアレクサンドリア(ウッチ)¹⁸⁾
- これらの中で、メナンドロス王が誕生した所のアレクサンドリアはどこであろうか。勿論、はっきりしたことはわからないが、

「アラサンダは『ギリシヤ人(Yona)の都市』であり、島(dīpa)は二つの河の間に存する陸地をいう。

panjshir川とカーブル川との間にある地域がそれに相当し、そこにはアレクサンドリア市の遺跡がある。

カーブルの北八〇km位のところにある白人治下アレクサンドリア（ベグラム）のことかと思う。ここなら五〇km南にはカーブル川も流れている。(カーブルから二〇km—三〇km東南にある川である。)

アレクサンドリアはエジプトやバビロニアなどを初めとして、世界には数多くのアレクサンドリアがあるが、しかしメナンドロスが生まれたアレクサンドリアは西北インド近辺であろう。なぜなら、ミリンダ王に対して「大王よ、アランサンダはここからどれだけ距っていますか」との那先比丘の問いに対して、「尊者よ、二百ヨーヂャあります」と答えているからである。

従って、メナンドロス王の出生地は中村元博士のいわれるように、アフガニスタンのカーブルの近くのアレクサンドリア市で生まれたということなる。

三、ミリンダ王と仏教帰依—「那先比丘経」—

アレキサンダー大王のインド侵入などによって、西北インドはギリシヤ系諸王が支配することになった。中でもメナンドロス王は仏教に帰依した王として有名である。このメナンドロス（ミリンダ）とナーガセーナ（那先比丘）との対談がミリンダパンハ *Mindapanna*（ミリンダ王の問い）となつて現存している。漢訳では『那先比丘経』である。そしてパーリ文と漢訳文との一致している部分はこの書の最古層に属すると考えられる。

漢訳は二巻本（上下巻）と三巻本（上中下巻）とがあるが、いずれも「失訳人名附東晋録」とあり、訳者不明である。東晋時代（三一七—四二〇）の訳であるから、四世紀までには漢訳の原本が成立したと思われる。なお、原典の成立は紀元前一世紀から紀元後一世紀頃といわれている。

いま二巻本によれば、まず王が那先比丘に問う。

「王復問那先 卿字何等。那先言。父母字我為那先」(大正三三、六九六a)

(「あなたは名前(字)は何か」というのに対して、「父母は私を那先と呼びます」と答えている。)

「王問那先 誰為那先者。王復問言。頭為那先耶 不為那先。王復言 耳鼻口為那先耶 不為那先」(大正六九六上)

(「王は『誰を那先なる者と為すのか』と問い、『頭が那先か』『眼耳鼻口が那先か』と問う。これに対して那先比丘は『そうではない』と答える」)

今度は那先比丘が王に問う。

「那先問王。何所為車者 軸為車耶 不為車。……那先言 輻為車耶 不為車。那先言 輞為車耶 不為車。那先言 轆為車耶 不為車。輓為車耶 不為車。輓為車耶 不為車」(大正六九六a)

(「那先が王に『何所が車であるのか』『軸が車か』『輻が車か』『輞が車か』『轆が車か』『輓が車か』と問うのに対して、王は『そうではない』と答える」)

これは有名な「車の譬喩」であり、「車に実体がない」ように、「那先という一個人も実体がない。すなわち、ここでは仏教の「無我説」が説かれているのである。

また「三十二相八十種好」が説かれ、そこでは『維摩経』の所説と同じ、泥水に咲く蓮花の譬えも説かれている。

二巻本によれば、

「王復問那先。佛為有三十二相 八十種好。身皆金色有光影耶」(大正七〇〇c)

「那先言。佛審有三十二相 八十種好。身皆有金色光影」

「王言。佛父母寧有三十二相 八十種好。身皆有金色有光影耶」

「那先言。佛父母無是相。」

「王言。如是相好是父母 無是相。佛亦無是相」

「王復言。人生子像其種類。父母無是相者佛定無是相」

「那先言。佛父母雖無是三十二相八十種好身 金光色者。佛審有是相」(大正三三、七〇〇c)

(王復問う。『那先よ、佛は三十二相 八十種好あり。身皆金色 光影有りとすのか』

那先言く『佛審に三十二相八十種好有り。身皆金色にして光影有り』

王言わく、『佛の父母寧ろ三十二相八十種好有り。身皆金色有り、光影有るのか』

那先言わく、『佛の父母是の相無し』

王言わく『是の如き相好 是父母に是の相無くば佛亦是相無からん』

王復言わく『人子生むに其の種類に像かたどる父母に是の相無くんば、佛定んで是の相無からん』と。

那先言わく『佛の父母是の三十二相八十種好 身金光色無くとも佛審に是の相有り』

佛は『三十二相 八十種好が有る』[㊦]といわれるが、その父母も『三十二相八十種好』があるのかといえは、父母には『その相は無い』といわれ、『父母に三十二相 八十種好がなくとも佛には是の相が有る』

といわれる。そこで泥水に長じて、美しい花を咲かせる蓮花の譬えが説かれる。

「那先言。王曾見蓮花不。王言我見之。那先言。此蓮花生於地長於泥水。其色甚好寧復類泥水色不。王言。不類地泥水色。那先言。雖佛父母無是相者。佛審有是相。佛生於世間長於世間。而不像世間之事。王言善哉善哉」
(大正三三、七〇〇c)

(「那先言わく。王曾て蓮花を見るや不や。王言わく『我れ之(蓮花)を見る』

那先言わく『此の蓮花は地より生じ泥水に長じて、其の色甚だ好し、寧ろ復泥水の色に類するや不や』
王言わく『地泥水の色に類せず』

那先言わく『佛の父母、是の相無し』と雖も、佛審に是の相有り、佛世間に生じ、世間に長じて、而して世間の事に像かたどらず』

と。

王言わく『善哉善哉』と』

ここでは、佛の父母は「三十二相八十種好」がないのに、その子の佛陀にはその相があるのは何故かといえ、泥水に長じて美しい花を咲かせる蓮花に譬えて、蓮花は地より生じ泥水に長じて、その花の色は泥水のような、きたない色ではなく、美しい花を咲かせる。それと同じように「三十二相 八十種好」のない父母から生まれた佛陀には、その相があることを説いている。

さて、メナンドロス王を初めとして、インドにおけるギリシヤ人の中には、仏舍利を供養したり、各地の仏教の窟院に柱、講堂の門、貯水池などを寄進した人がいたという。^{②④}

『マヌ法典』によれば、カーストの上からも、ギリシヤ人はムレッツチャ（夷狄いてき＝野蛮人）といわれて差別され、バラモン教的な階位秩序を遵守するインド社会に容れられないギリシヤ人は、四民平等を説く仏教に帰依したことが容易に理解できる。^{②⑤}

したがって、仏教は異民族を差別せず、根本的にはカースト制そのものを認めない立場にあり、それは丁度、大小の河が大海に流入すれば、皆な一味平等の海水となるように、教団に入れば、カーストに関係なく、皆な平等に取り扱われるようなものだといわれている。このような背景のもとに、仏教はインドだけにとどまらず、異民族の中にも信奉され、世界の宗教、世界の三大宗教（または四大宗教）の一つとなつていったと考えられる。

四、仏教の中国伝来と『瑜伽師地論』並びに『維摩經』の写本発見

仏教が世界の三大宗教の一つとなるには、勿論、異教徒にも受け入れられる教義・思想も重要であるが、その伝播のきっかけがなければ伝わらない。その第一の功労者はアシヨールカ王であると思う。

BC・二六八年頃、マウリヤ王朝の三代目の王となったアシヨールカ王は、カリンガ地方の征服のために生じた悲惨な結果が王を熱心な仏教信者とならしめたといわれる。そして王は自ら国内の各地へ「法の巡行」をして、その地方の住民に法の教悔をなしたともいわれる。すなわち、アシヨールカ王は戦いによってではなく、「法の伝道」によって、インド全土を統一したともいえる。

またアシヨールカ王は、インドの辺境地およびギリシヤ系の諸地域へ法の使者を派遣したといわれ、Majjhantikaをガンダーラへ、MaharakhitaをYona（ギリシヤ系異民族の地）へ、Mahindaをセイロン（Lanka）へなど多くの伝道者を派遣している。

仏教はこのガンダーラからシルクロードを通じて、中国、朝鮮半島を通じて日本へも伝来したと思われ、ネパールやチベットもこの北伝仏教が伝わったと思われる。またセイロンから、ビルマ、タイなどへも伝来し、南伝仏教となつたと考えられる。

ここで釈尊の教えは、どのようにして伝わったかといえは、第一結集が仏滅の年、王舎城で行われて、「経」と「律」が成立したが、その後「論」も成立し、口誦で伝えられていたが、これらの各部派の三蔵が初めて文字に書写されたのはBC・一世紀（BC・八八―七六）のことで、それはセイロンの上座部^⑩においてであるといわれている。

中国に仏教が伝来し、最初に確実に仏教を信仰したのは、漢の明帝の異母弟であった楚王英である。彼は建武十七年（AD・四一年）楚王となり、二十八年楚国に赴任したといわれている。

初期の漢訳仏典としては、後漢の時代（二世紀）に安世高が安息国から来て『安般守意経』や『陰持入経』など三十四部四〇巻を訳出した。

また支婁迦讖（支讖）は大月氏国から来て『道行般若経』『首楞嚴経』『般舟三昧経』『阿閼佛国経』など三十三巻を訳出したといわれる。

これらの経典を初めとして、その後、中国へもたらされた数々の経典や論書が漢訳されたということは、サンスクリット原典などが中国へ持つて来られたはずなのに、中国本土には、それらの原典が殆ど残っていない。どうしてであろうか。唯一の例外は敦煌から見つかった敦煌文書などの原典ぐらいであろう。

もともと現在はチベットも中国の一部であるから、この点からいえば、このチベットも例外ということになる。

七世紀の玄奘三蔵（六〇二―六六四）は、すでに百歳を超えていたといわれるナランダのシーラバドラ（戒賢）のもとに行つて、唯識思想を初めとする仏教教義を学んだといわれるが、そのきっかけは『十七地論』すなわち『瑜伽師地論』〔の前半〕の原典や種々の経典や論書の原典を求めて、国禁を犯すのを覚悟の上で、貞観二年（六二九）（一説には貞観元年六二七）³⁴にインドへ命がけて出発したといわれる。

この『瑜伽師地論』の梵本は、古くは荻原雲来博士の *Bodhisatvabhūmi*（菩薩地） 1（1930, Tokyo） 2（1936, Tokyo）の出版があり、これはネパールで発見され、ケンブリッジ大学図書館に保存されていた梵本写本を、一九〇四年（明治三七年）に荻原博士が『瑜伽論菩薩地』の梵本であることを発見されたものである。³⁵

その後、ラーフラ・サンクリトヤヤーナがシャル寺で『瑜伽師地論』の梵本を発見し、その写真版をもとにバクターチャルヤによつて *Bhattacharya: Yogācārabhūmi*（1957）が出版された。

これは漢訳『瑜伽師地論』の巻一―巻10に相当する。

その後、N. DUTTによつて *Bodhisatvabhūmi*（1966, Patna）が出版された。これは荻原本とほぼ同じであるが、

荻原本 (p.1-p.2) では最初の部分の梵本が欠けていて、チベット訳で補われている個所が梵本 (p.1) のままになっている。これは漢訳『瑜伽師地論』巻35—巻50に相当する。

ཏཱ་ལའ་བོ་མཆོག་ཀྱི་ཤུལ་ལོ་ལོ་ལྔ་པ་ཤྲཱ་བ་ཀམ་མཁུ་མུ་མི་ (1973; Patna) が出版されたが、これは漢訳の巻21—巻34に相当すると思われる。

今から何年前であったか、はっきり覚えていないが、大正大学で学会があり、その折、特別会場で『瑜伽論』の梵本が展示されたことがあった。それを見て私はびびくりした。シャル寺で発見された梵本の写本ではクリップで、はさんだ個所はクリップで隠れていて、梵本が写っていないのに、大正大学の展示の写本は、すべてきれいに写っているのではないか。私は直感的にこれはラーフラ・サンクリトヤーヤナの写真版の原本が中国民族図書館にあり、その原本からの写真版に違いないと思った。その頃、大正大学と中国とは共同研究を行なっており、『瑜伽論』の梵本に關しても、大正大学と中国民族図書館との日中仏教文献研究交流の一環として、共同研究^⑧が行われていたからである。

洩れ聞くとところによれば、『瑜伽論』の巻1—巻50に相当する、いわゆる本地分の梵本が見つかったとのことであるが、現在、公開されているのは、巻1—巻10 (五識身相應、意地、有尋有伺等三地)、巻21—巻34 (声聞地)、巻35—巻50 (菩薩地) であるから、巻11—巻20の梵本が現存するのか、しないのか、はっきりしない。もし現存するのなら、一刻も早く出版してほしいと思う。

この『瑜伽論』を中心に、大正大学総合仏教研究所と中国民族図書館との日中仏教文献研究交流の中で、奇蹟ともいふべき『維摩經』の梵本がポタラ宮殿で見つかるといふ快挙があり、それが各新聞に報道された。

今まで『維摩經』は漢訳とチベット訳しかなく、梵本は見つかっていなかった。長尾博士はチベット訳を中心に全訳を試みられ、「その(維摩經) サンスクリット本は引用の形で他書に数個の断片が見られる以外には存在せず^⑨」と凡例に記しておられる。

昨年、『維摩經』の梵本 [Vimalakīrtinīdeśa] ^⑧ が出版された。誠に喜ばしいかぎりである。この「梵藏漢对照『維摩經』」のテキストは梵藏对照の中、特にチベット訳がチベット文字のままになっているので、私には使いやすい。(ローマナイズしてあると、チベット語は読みにくい。)

漢訳も支謙訳と羅什訳と玄奘訳とを対比されているので、大変便利である。そこで以前から気になっていた『維摩經』の梵本が、これによって明らかになったので、数箇所について考察してみようと思う。

初めに「佛国品」の「佛以一音演說法」を検討してみたい。この文は偈頌 10a, 10c, 11a に三回出ていて、サンスクリットはそれぞれ異なるのに、漢訳では羅什訳(大正一四、五三八a)も玄奘訳(大正一四、五五八c)も全く同じ訳であるから、玄奘訳は羅什訳をそのまま採用したものと思われる。

このチベット訳はそれぞれ異なるから、原文のサンスクリットも異なるであろうことはわかるが、ここは偈頌であるので、韻律を考えなくてはならず、それに合致したサンスクリットを想定することは、かなりむづかしかったように思う。

そこで今度発見された『維摩經』の梵本を見ると、10a は SK. p.24, 71 ekam ca vācam bhagavan [pramūhase] (世尊は一音で〔演説する〕)、10c は該当するサンスクリットはなご。11a 1st p.24, 79 ekaya vācāya udhritāya (説法された一音を〔それぞれに理解した〕)となっている。

次に『弟子品』の「心垢故衆生垢。心淨故衆生淨」(大正五四一b、羅什訳)は玄奘訳では「心雜染故有情雜染。心清淨故 有情清淨」(大正五六三b)となっているが、サンスクリットは、

^{p.118, 17}
cittasamkleśāt satvāḥ samkliśyante

cittavyavadānād viśudhyanti

となっているから、その源流は、『相應部經典』にあると考えられる。『相應部經典』には、

「比丘等よ、心の汚れの故に衆生は汚され、心の浄らかさの故に衆生は浄まる」

cittasankilesā bhikkhave satta sankhissanti

cittavodanā satta visujjanti || (Samyutta-Nikāya III p.151, 122, 131)

となっていて、パーリ語とサンスクリットとの違いはあるが、『維摩経』の原語とほぼ一致している。なお『雑阿含』では「比丘。心惱故衆生惱 心浄故衆生浄」(大正二、六九c)となっている。^⑧

次に大谷大学の同窓会誌の「無尽燈」の原語であるが、『維摩経』の「無尽燈」と大いに関係があると思われるので調べてみた。

『菩薩品』の「維摩詰言。諸姉有法門名無尽燈」(大正五四三b、羅什訳)「無垢称言。諸姉当知有妙法門名無尽燈」(大正五六六b、玄奘訳)となっているが、サンスクリットは

^{p.166, 13}
āha | asti bhagīno ksayapradīpan nāma dharmamukha

となっている。しかし、その直後の「無尽燈」の原語は aksapradīpan (p.166, 110) とあるが、ksayapradīpan の誤りではないかと思う。いずれにしても、「無尽燈」の原語は aksayapradīpan であることがはっきりした。

次に私が『維摩経』の梵本が見つかったと聞いて、一番確かめたかった箇所は『文殊師利問疾品』の

「從_レ癡有_レ愛 則我病生」(大正五四四b 羅什訳 大正五二五c 支謙訳)

「如_二諸有情_一無明有愛生來既久」(大正五六八a 玄奘訳)

「從癡有愛」を時には「癡従り愛有り」と読んで、「癡(無明)と愛」との関係で論ぜられることもあったが、私はチベット訳が「無明と有愛」と読んでるので、「癡と有愛従り」と読むべきであろうと、授業でも論文指導でもいつていたが、今回、サンスクリットが発見されて、「愛有り」ではなく、「有愛^{うあい}」と読むべきことが実証された。

サンスクリットは p.188, 114 avidyā bhavatsīṅga (無明と有愛) である。ちなみにチベット訳を見ると、ma rig

pa dan | srid pahi sred pa となっていて、サンスクリットと一致している。勿論、漢訳も「癡と有愛とに従り」と読めば全く問題はないが、そう読まないで、「癡従り、愛有り」と読む人がかなりいたので、原典の上からはそうは読めないということだけつけ加えておきたい。

最後に「維摩の一黙」であるが、『不二法門品』の終りに、

「時維摩詰默然無言」(大正五五・一 羅什訳)

「時無垢称默然無説」(大正五九八・c 玄奘訳)

となっているが、サンスクリットは

p.350, 74
atha vimalakīrtir icchavis tūṣṇim abhūd

その時、リッチャビの維摩詰は默然として

「語らなかつた」

となっている。従って有名な「維摩の一黙」のサンスクリットは *tūṣṇim abhūd* (默然として「語らなかつた」) ということが明らかになった。

ま と め

アレキサンダー大王のインド侵入は、北はヒマラヤ山脈とヒンドウクシユ山脈に囲まれ、東南西の三面は海に囲まれ、独自の文化をもつインド文化圏の人々を驚かさせたにちがいない。

また仏教の教え自体がインドのカースト制の社会にあつて、平等思想を強調し、

「大小の河が大海に入れば、一味平等の海水となるように、出身のカーストは異なつていても、教団に入れば出身カーストに関係はなく、その点では皆な平等である」

という思想が異民族にも受け入れられ、ギリシヤ系の王も仏教に帰依したと考えられる。

マウリヤ王朝三代目のアシヨーカー王は、カリンガ征伐による悲惨な結果が彼をして熱心な仏教信者にならしめたといわれ、戦いによって勝ち取るのではなく、法大官を置き、法(ダルマ)の伝道によって、全インドを統一したといわれる。そしてアシヨーカー王はインドの辺境地およびギリシヤ諸地域へ法の使者を派遣したといわれる。

Majjhantika や Gandhāra (ガンダーラ) や Kasmira (カシュミール) へ

Maharakkhita や Yonakaloka (ヤヴァナ、ヨーナカ、ギリシヤ系) へ

Kassapagotta や Himavanta (ヒマラヤ) へ

Mahinda や Lanka (ランカー、セイロン) へ

伝道師派遣をしたと伝えられるが、これらの伝道師によって仏教は伝えられ、主に部派仏教が形成されたといわれている。その後、中国や朝鮮半島を通じて、わが国にも仏教は伝来する。ここに仏教が世界の三大宗教(または四大宗教)に数えられるようになった源流がある。

なお、最初の予定では『大乘莊嚴經論』の写本についても論ずるつもりでいたが、すでに予定枚数に達したので、『大乘莊嚴經論』の写本については別の機会に論ずることにする。

註

- ① 『維摩經』のサンスクリットが発見されたことを初めて知ったのは、確か新聞紙上であったかと思うが、その後、松濤泰雄氏の講演録『維摩經』サンスクリット完本の発見(平成十四年二月講演)があり、最近『梵藏漢対照『維摩經』』智光明莊嚴經(大正大学出版会二〇〇四年)が出版された。なお、これに関連しては私も定年退職記念講演の中で語ったことがある。(『仏教学の進展と今後の展望』仏教学セミナー第七五号三三三頁参照)

- ② アレキサンダーが西北インドに侵入したのは、B.C. 三二七年説(佐々木教悟他共著『仏教史概説—インド篇—三八頁)

(平川彰「インド仏教史上巻」二八六頁)(中村・早島共著「ミリンダ王の問い」三三五頁)とB.C. 三二六年説(メガス
テネーアの『インド誌』(中村元「インド的思惟」三頁)(中村元「インド古代史上、三八六頁)(平川彰「インド仏教史上
巻」一〇七頁)との両説があるが、私がインド侵入をB.C. 三二七年としたのは、B.C. 三二七年春にパキスタンとアフガニ
スタンのヌリスタンとのあいだの山岳部、ヒンズークシ山脈の山道にアレキサンダーは立つ二九才。ジュラム(ハイダスカ
ス)川、(インダス河に合流するインダス河より東の川)での戦いで攻撃開始日、つまり渡河の日は五月二十一日頃である。
十一月二十一日頃に出発の準備が整い、パンジャーブとシンド征服にかかる。

B.C. 三二六年の夏、アレキサンダーはパタラ(現在のハイデラバード)に到着するとあるので、B.C. 三二七年説を採用
したが、B.C. 三二七年は出来事の順序と場所が史料によつて食いちがっているために、アレキサンダーの歴史の中で不明の
一年と言われている。(マイケル、ウツド著「大遠征アレキサンダーの野望」一五八頁、一六八頁、一八二頁、二〇〇頁参
照。)

③ アレキサンダー大王は、インダス河を渡り、インダス河と合流する川、ジュラム(ハイダスカス)川まで進攻したようであ
る。

④ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」六三頁参照。

⑤ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」六六頁参照。

⑥ 干潟竜祥「ジャータカ概観」一二頁参照。

⑦ ・白人治下アレクサンドリア(ベグラム)

・アラコシアのアレクサンドリア(カンダハル)

・アレクサンドリア・マルギアナ(メルブ)

・アレリアのアレクサンドリア(ヘラート)

・最果てのアレクサンドリア(最北の地域)などがある。

⑧ 注②参照。

⑨ 中村元「インド的思惟」三頁参照。

⑩ 中村元「インド的思惟」四頁参照。

- ⑪ 同書 五頁参照。
- ⑫ 同書 三一頁参照。
- ⑬ 同書 三五頁参照。
- ⑭ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」四六頁参照。
- ⑮ 中村元「インド的思惟」二三頁参照。
- ⑯ MilindaをMenandrosと比定する根拠として、いくつかの根拠が示されているが、インドでは個人の名にindra, indaがつくと「帝王」「力のある者」となる。従ってMenandros→Milindaとなる。また真諦訳「俱舍論」卷22には「旻隣陀」、玄奘訳卷30では「畢隣陀」と音写されている。(中村元「インド的思惟」三四頁参照。
- ⑰ 中村・早島共著「ミリンダ王の問い1」三四九頁参照。
- ⑱ 中村元「インド的思惟」三八頁参照。
- ⑲ マイケル・ウッド「大遠征 アレキサンダーの野望」の地図参照。
- ⑳ ここで用いた距離の「何km」は、本の地図にある縮尺を参考にしているので、あまり正確でないかもしれない。
- ㉑ 中村元「インド的思惟」三八頁参照。
- ㉒ 同書 三九頁参照。
- ㉓ 註②参照。(B.C.三二七年説とB.C.三二六年説とがある。)
- ㉔ 中村元「インド的思惟」(はしがき二頁)参照。
- ㉕ 中村元「インド的思惟」一九頁参照。
- ㉖ 中村・早島共著「ミリンダ王の問い1」三一九頁参照。
- ㉗ 『増一阿含経』第四六や『佛本行集経』第九には「佛陀や転輪聖王には『三十二相 八十種好』がある」と説かれている。
- ㉘ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」四九頁参照。
- ㉙ 中村・早島共著「ミリンダ王の問い1」三七二頁参照。
- ㉚ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」五〇頁参照。
- ㉛ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」四〇頁参照。

- ③① 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」四一頁参照。
- ③② 鎌田茂雄「中国仏教史」一九頁参照。
- ③③ 鎌田茂雄「中国仏教史」二五頁参照。
- 横超・諏訪共著「羅什」二九頁参照。
- ③④ 桑山・袴谷共著「玄奘」三九頁、五八頁参照。
- ③⑤ 山田竜城「梵語仏典の諸文献」一二五頁参照。
- ③⑥ 木村高尉「声聞地梵文の欠落とその補填」(印度学仏教学研究第40巻第2号)九二二頁参照。
- ③⑦ 長尾雅人訳注『維摩経』一六頁参照。
- ③⑧ 「漢藏対照『維摩経』Vinakṛīṇīdesa」(大正大学総合仏教研究所梵語仏典研究会二〇〇四年)拙稿「仏教思想9 唯心と唯識」(「心」平楽寺書店)二二二頁、二二六頁註(2)(3)参照。
- ④① 羅什訳の大正藏経には「從癡有愛則我病生」(大正五四四b)とあり、黄檗版の『維摩詰所説経』も、羅什訳であるので全く同じである。しかし玄奘訳の大正藏経には「無明有愛生来既久」(五六八a)とあり、返り点がなくチベット訳、サンスクリットと一致するともいえる。今度発見されたサンスクリットからは、羅什訳のように読むことは無理だと思われるが、しかしこの返り点は僧肇の「注維摩詰経」(大正三八、三七一c)によつて、大正藏経の出版の時、つけられたかもしれないが、羅什訳自体はサンスクリットと異なっていない。それでは「注維摩経」の解釈をどう理解すればよいかということになるが、これはインドの仏教が中国へ伝来した後、中国独自の発展した一端ともいえるのではないか。
- ④② 長尾博士の『維摩経』のチベット訳によれば「無知があり、存在への愛着があるかぎり」と正しいサンスクリットを予想して訳されている。
- ④③ 佐々木教悟他共著「仏教史概説―インド篇―」四三頁参照。